

実体理論者が努力を重視するとき

—他者の能力評価における評価者の暗黙理論と努力情報の効果—

鈴木 啓太 (東京大学 大学院人文社会系研究科, atiek328ikuzus@yahoo.co.jp)

岡 蒼透 (東京大学 文学部, ao.ok0616@gmail.com)

村本 由紀子 (東京大学 大学院人文社会系研究科, yukikom@l.u-tokyo.ac.jp)

Entity theorists' value of effort: The effects of implicit theories and information of effort on evaluating others ability

Keita Suzuki (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, Japan)

Aoto Oka (Faculty of Letters, The University of Tokyo, Japan)

Yukiko Muramoto (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, Japan)

Abstract

Previous research of implicit theories has revealed that when a person needs to evaluate others ability, incremental theorists (who believe ability is malleable) tend to value effort, whereas entity theorists (who believe ability is fixed) tend to value results. However, recent research shows that entity theorists tend to search and find the most appropriate task for themselves on task performance, suggesting that it would be more important among entity theorists than incremental theorists to make precise evaluation of ability. Based on this assumption, we hypothesised that, when entity theorists need to evaluate other's ability, they would use the information of whether he/she made enough effort or not. To test this hypothesis, we conducted a paper and pencil experiment by using a vignette of a figure who is preparing for exam, in which we manipulated (1) the amount of effort the figure made and (2) whether the figure's grades improved or not. We measured to what extent participants would attribute the outcome to the figure's ability and effort, and how much effort they would request to the figure for his future performance. As a result, entity theorists attributed the outcome to the figure's ability when his grades improved with little effort or did not improve despite his effort. Also, entity theorists requested the figure to make further effort when he did not work hard and his grades did not improve. These results suggest that entity theorists evaluate other's ability not just by outcome but by paying attention to the information of his/her effort.

Key words

implicit theories, ability, evaluation, information of effort, request for further effort

1. 問題・目的

暗黙理論とは、人間の能力や特性の可変性に関する信念で、人間の能力や特性は可変的あるとする増加理論 (incremental theory) と、人間の能力や特性は固定的であるとする実体理論 (entity theory) に分かれる (Dweck, 1986)。本研究は、増加理論者は努力を重視するが実体理論者はそうではない、という従来の知見 (Dweck, 1986) に対し、今まで扱われてこなかった「情報としての努力」という切り口から、実体理論者の方が増加理論者よりも努力を重視する可能性があることを例証する一つの試みである。

1.1 暗黙理論が課題遂行者に与える影響：達成目標・原因帰属・課題選択方略

個人がいかなる暗黙理論をもつかによって、課題達成に関わる様々な認知過程に差異のあることが知られている。増加理論者は自ら困難な課題を探したり、失敗後も努力を続けたりするような熟達志向的 (mastery-oriented) な反応を示し、自分の能力の向上そのものを追求する学習目標 (learning goals) を持ちやすいと言われている。一方で、実体理論者は自分の能力に関する肯定的な評価を得るこ

とを追求する遂行目標 (performance goals) を持ちやすいとされる (Dweck, 1986; 2006; Dweck & Leggett, 1988)。

個人が持つ暗黙理論によって異なる目標は、原因帰属の方法にも影響を与えていると言われている。学習場面において、増加理論的な生徒は、成績の停滞を自分の努力不足などに帰属し、努力を継続させることができる。一方で実体理論的な生徒は、成績の停滞を自分の能力の低さに帰属し、努力を継続できなくなることが知られている (Blackwell, Trzesniewski, & Dweck, 2007; Hong, Chiu, Dweck, Lin, & Wan, 1999)。Hong et al. (1999) は実験室実験を行い、参加者が行った課題に対してネガティブなフィードバックを与えた時に、実体理論者は増加理論者に比べてネガティブな結果を努力不足に帰属する度合いが低いことを示した。この結果は、暗黙理論を個人差変数として分析した場合だけでなく、プライミングによって暗黙理論を操作した場合でも同様に得られた。また、実験室実験のみならず、Blackwell et al. (2007) は、中学生を対象とした継続的調査を行い、実体理論的な生徒であるほど、成績の悪さを自分の能力の低さに帰属し、失敗した課題を避けるなどネガティブな学習方略をとるようになることを示した。このように、先行研究では一貫して、遂行の結果と、その結果から推測される個人の能力を重視する実体理論者の姿が描かれている (see Dweck, 1986)。

一方で、近年新しいスコープから暗黙理論を扱う研究も

なされつつある。相田・村本(2016)や鈴木・村本(2017)は、従来の暗黙理論研究が単一課題場面のみに着目し、複数ある課題のどれかで高いアウトプットを目指す複数課題場面には着目してこなかったことを指摘した。その上で、そのような複数課題場面では、個人の持つ暗黙理論によってどのように課題を選択し取り進むかという、課題選択方略が異なると指摘している。彼らによれば、増加理論者ははじめに割り当てられた課題に局所的に努力を注入してその能力の向上を目指す課題熟達方略をとり、実体理論者は複数ある課題の中から自分に合った課題を探そうとする適性探索方略をとると言われている。現実社会においては、大学受験に際して文系か理系かを選択する状況や、就職に当たって職種を選択する状況など、複数の課題の選択肢から自分に向いているものを見極める必要が生じることも珍しくないため、複数課題場面での暗黙理論に着目することには一定の意義があるといえる。

1.2 暗黙理論が他者評価に与える影響

上に挙げた一連の研究は、ある特定の暗黙理論を持つことが個人の課題遂行やその際の認知過程に及ぼす影響を検討したものであるが、一方で暗黙理論が他者評価に与える影響も、同様の枠組みで数多く研究されている。そこでは、課題遂行に失敗した他者に対する評価に際しても、実体理論者は増加理論者に比べ、その結果の原因を、他者の努力ではなく能力に帰属する傾向が強いことがしばしば示されている(e.g., Buttler, 2000; Rattan, Good, & Dweck, 2012)。たとえば、Rattan et al. (2012)は場面想定法を用い、実験参加者に教師の立場をとらせ、生徒の能力を評価させた。この時、実体理論者は増加理論者に比べて、生徒の成績の悪さを能力の低さに帰属することが明らかになった。

こうした従来の多くの先行研究の流れとは異なり、今瀧・相田・村本(2018)は、実体理論的な考え方が他者評価に際してポジティブな効果をもたらす場合があることを見出した。今瀧らは、集団全体のアウトプットを高めるためにリーダーが成員を適切に配置する必要があるような場面に焦点を当てて、実験室実験を行った。具体的には、ある成員が課題の遂行に失敗する状況をリーダー役の実験参加者に見せた後、その課題を引き続き同じ成員に取り組みせるか、別の成員に移行させるかを決定するよう求めた。その結果、増加理論者は実体理論者に比して、同じ成員に課題遂行を継続させる傾向が強かったが、その理由は、増加理論者の方が実体理論者よりも当該成員に高い期待を寄せているためではなく、新しい成員に低い期待しか寄せていないためであることが明らかとなった。増加理論者は、ある成員の失敗の原因を能力に帰属しない反面、同じ課題に別の成員が取り組んでも同様に良い成績を挙げることはできないと考えていたのである。今瀧らの知見は、複数の集団成員の適性を見極めてそれぞれに合った課題を配置するというリーダーの役割を考えた場合に、実体理論者の方が適切な判断をする可能性があることを示唆している。

このように、他者の課題遂行を観察し、その能力や適性を適切に見極めることや、その判断に基づいて他者の

アウトプットを最大化すべく適切な指示や差配を行うことは、評価者の重要な役割であると考えられる。ただし、今瀧他(2018)の研究では、参加者は、実験室に設定された一時的な課題遂行場面で、他者による短時間(5分間)の遂行結果のみに基づいて、他者評価と判断を行うよう求められた。現実場面で行われる他者評価において、増加理論者・実体理論者がそれぞれどのような情報に基づき、どのような他者評価を行うかについては、より慎重に検討する必要があるだろう。

他者のアウトプットを最大化することを目的として当該他者の評価を行う場合、増加理論者と実体理論者とは、重視する評価の観点が異なっていると考えられる。先述のように、実体理論者が適性探索方略をとることを踏まえると、当該他者の「能力を正確に評価する」という問題は、増加理論者よりも実体理論者にとって重要性の高いものであるといえる。能力は努力で変わりうると考える増加理論者にとっては、評価しうる他者の能力はあくまで一時的なものでしかない。仮に、能力を低く評価された人物に課題を割り当てても、努力によって能力を伸長させ、高いアウトプットを得ることができると考えるだろう。しかし、能力は固定的だと信じる実体理論者にとっては、他者の能力の評価を誤ることは致命的である。仮に、他者に適性のない課題を割り当ててしまえばその人物はずっとその課題で低いアウトプットを出し続けることになると考えるだろう。つまり、実体理論者にとってクリアしなければならない問題は、課題に取り組む個人がその課題に適した能力をもつかどうかを正しく評価することであるといえる。

1.3 情報としての努力

以上の通り、実体理論者のとる適性探索方略に基づく他者評価において重要な点は、個人の能力を正しく評価することであると考えられる。前述のとおり、従来の先行研究によれば、実体理論者は「他者の課題遂行の結果はその他者の能力を反映している」と考えがちであることが示されているが、彼らは常に、他者の能力を評価するに際して、遂行結果以外の情報を重視しないのだろうか。本来、能力を評価することにおいて、その判断材料となるものは、遂行結果以外にも様々あるといえるだろう。本研究では、その判断材料となる情報として、「評価対象の他者が投入した努力」に着目する。ある個人が課題で同じ結果を出したとしても、それまでに投入した努力量の情報次第でその個人に対する能力の評価は変わってくるだろう。実体理論者にとってクリアすべき課題が能力の正確な評価であるならば、この努力の情報は無視できないはずである。逆に、増加理論者にとっては、他者が課題遂行に際して投入した努力量の情報は、その他者の遂行の結果を判断するうえでは重要だが、能力の評価には影響しないだろう。すなわち、他者の能力評価に際しては、増加理論者よりも実体理論者の方が、当該他者が投入した努力の情報を重視し、その多少によって判断を変える可能性があると考えられる。

この予測は一見すると、実体理論者は結果にのみ重きを置き、努力を軽視する(Dweck, 1986)という従来の

知見に反するものである。しかし、従来の研究が指摘してきたのは、能力が努力によって向上する可能性を小さく見積もるといふ実体理論者の姿であり、そこには努力を能力評価の情報としてとらえるという目線は見られなかった。本研究は、従来の研究では扱われなかった「情報としての努力」という側面に着目し、暗黙理論によって努力の情報を重視する程度がどのように異なるかという問いの検討を通じて、より包括的に暗黙理論の性質を明らかにすることを目的として、実証研究を実施することとした。検証される仮説は以下の2点である。

1.4 仮説1：努力 - 結果の関係に対する認知

実体理論者にとって重要なのは、評価対象となる他者に、特定の課題を遂行する能力があるかないかを判断することである。この時、ただ単にポジティブな遂行結果（成功）が得られたからと言って、その人物に能力があると正確に判断することはできないだろう。この時、努力せずにポジティブな結果が得られたならば、それは能力があったからであるといえ、原因を能力に帰属することができる。もし努力した末に得られたポジティブな結果なら、その結果から能力があると結論付ける（能力に帰属する）ことはできないだろう。逆に、努力をした末にネガティブな遂行結果（失敗）が得られた時は、その原因を能力（のなさ）に帰属できるが、努力せずにネガティブな結果が得られた場合は、その結果から能力がないと結論付ける（能力に帰属する）ことはできないだろう。実体理論者の課題が能力の正しい評価であるなら、このように、努力の情報によって、能力に原因帰属する度合は変化することが予測される。一方、増加理論者については、どのような場合であっても遂行結果を能力に帰属する度合は低く（Dweck & Legget, 1988）、努力の情報を重視する姿勢は見られないことが予測される。

1.5 仮説2：さらなる努力の要求

もし実体理論者が遂行結果を能力に帰属するための情報の一つとして努力を捉えているとすると、情報を得るためにさらなる努力を要求することも考えられる。それは特に、能力に帰属できるか否かの判断が難しい場面に生じると考えられる。ここでは、努力して結果が向上した場合と、努力しないで結果が出なかった場合が、能力に帰属できない場面であるといえる。しかし、すでに前者の場合は努力をしているので、後者の場面でより努力を要求すると考えられる。一方、増加理論者にとって努力は、自分の能力を伸ばすための手段であるがゆえに（Dweck, 1986）、努力が足りない場合にさらなる努力を要求すると考えられる。よって、実体理論者は努力せずに結果が出なかった場合にさらなる努力を要求するのに対し、増加理論者は結果の如何にかかわらず努力しなかった場合にさらなる努力を要求すると予測した。

1.6 実験概要

上記の仮説の検証のため、場面想定法を用いて以下の

ような実験を行った。実験参加者に対して、刺激人物がテスト勉強をする様子とその結果を記した短いシナリオを提示した。ここで刺激人物の努力量（努力少・努力多）と遂行結果（成績停滞・成績向上）を操作し、それぞれの場合において、テストの結果を能力および努力にどの程度帰属するかと、刺激人物にさらなる努力をどの程度要求するかを参加者に尋ねた。上記の仮説1、2に対応する作業仮説は以下の通りである。

- 仮説1a：実体理論者は努力少・成績向上条件と努力多・成績停滞条件において能力に帰属する度合いが高くなる。
- 仮説1b：増加理論者は条件によらず能力に帰属する度合いは一定である。
- 仮説2a：実体理論者は努力少・成績停滞条件でさらなる努力を要求する。
- 仮説2b：増加理論者は努力少条件でさらなる努力を要求する。

2. 方法

2.1 実験デザイン

上記の通り、本研究ではシナリオによる場面想定法を用いた質問紙実験を行った。刺激人物がテストのために努力を行ったことと、その結果を提示した。この時、①刺激人物の努力量（努力少条件・努力多条件）と、②遂行結果（前回のテストと比べて停滞条件・向上条件）をそれぞれ独立変数として操作した。実験デザインは2要因4水準の参加者間計画であった。また、質問紙で参加者の暗黙理論を測定し、暗黙理論得点として分析に加えた。

2.2 実験参加者情報

参加者は、東京大学の学生120名（男性76名、女性44名）、平均年齢は20.6歳（標準偏差1.41歳）であった。

2.3 シナリオの内容

シナリオでは、まず刺激人物であるA君が、半年に一度行われる全国模試を受けると教示したうえで、A君の英語科目における努力量とその結果に関する記述をそれぞれ2通り作成し、いずれか一方を提示した。具体的なシナリオの文面は以下の通りであった。

A君は現在高校2年生で、あなたが高校に在籍していたころの部活の後輩です。

A君は、学生の総合的な学力レベルを測る「全国模試」を今月受験しました。その模試は半年に一度行われ、その時点での自身の実力が分かるようになっていきます。

A君は〔（努力少条件）コツコツと努力することが苦手で、この全国模試に向けても、英語科目においては学校の授業以外には週に1時間程度しか勉強しませんでした。／（努力多条件）この全国模試に向けて、特に英語科目において学校の授業の他に週に15時間は勉強すると決め、熱心に努力を続けてきました。〕

今回の模試と前回の模試の結果を比較すると、英語科目においてA君の成績は〔(停滞条件)ほとんど上がっていませんでした。/(向上条件)とても上がっていました。〕

2.4 質問項目

2.4.1 暗黙理論尺度

シナリオを提示する前に暗黙理論尺度 (Hong et al., 1999; 及川, 2005) を一部改変したもの (人一般の信念を尋ねるために、「私」という表記を「人」に改変) を使用し、それぞれ6件法 (得点が高いほど実体理論的) で測定した。具体的には、「人は一定の才能を持って生まれてきており、それを変えることは実際にはできない」「才能はほとんど変えることのできないものだと思う」「新しいことを学ぶことはできても、基本的な才能は変えられない」の3項目に回答させた。またフィラー項目として自尊心尺度 (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982) の5項目を測定したが、分析には使用しなかった。

2.4.2 A君の結果の原因帰属

シナリオ提示後、参加者がA君の結果を能力及び努力にどの程度帰属するかを測定した。具体的には、A君の成績がシナリオのような結果になった原因として、「もともと持っている才能」「努力の量 (時間)」「努力の質 (仕方)」はどの程度重要であると思うかを「1. 重要でない～5. 重要である」の5件法で回答させた。

2.4.3 さらに努力の要求

A君の結果を踏まえ、「A君はもっと勉強時間を増やすべきだ」という文章に対し、どの程度そう思うかを、「1. そう思わない～5. そう思う」の5件法で回答させた。その他、A君の結果を知って抱いたさまざまな感情や認知に関する質問項目も設けたが、以降の分析には用いなかったため、詳細は割愛する。

3. 結果

3.1 暗黙理論尺度

暗黙理論尺度の3項目の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .82$ という高い値が得られた。このことから、暗黙理論尺度の内的一貫性は十分であるとし、以降の分析では3項目を単純加算平均したものを「暗黙理論得点」として

用いた。なお、暗黙理論得点が高いほど実体理論的である。

3.2 単純集計結果

表1に、分析に使用した項目の単純集計結果、およびそれらの相関係数表を付す。暗黙理論と能力帰属に有意な正の相関が見られ、実体理論者ほど結果を個人の能力に帰属する傾向があることが分かった。これは従来の知見と一致する結果であるといえる。また努力帰属と能力帰属には有意な負の相関が見られたが、暗黙理論と努力帰属 (努力の量・質とも) に相関は見られなかった。また、さらに努力を要求する程度は努力の質に帰属する度合いとの間に有意傾向の負の相関が見られた。

3.3 仮説の検証

仮説1の検証のため、独立変数に暗黙理論、努力量 (努力少=0, 努力多=1)、遂行結果 (停滞=0, 向上=1)、およびそれらの交互作用、従属変数に能力への帰属の程度を投入した重回帰分析を行った (表2)。分析の結果、暗黙理論の主効果 ($\beta = .306, p < .001$)、努力量 \times 遂行結果の交互作用 ($\beta = -.329, p < .001$)、そして暗黙理論 \times 努力量 \times 遂行結果の二次の交互作用 ($\beta = -.174, p = .038$) がそれぞれ有意であった。二次の交互作用が有意だったので、単純交互作用の検討を行った (図1)。その結果、増加理論者 (-1SD) の間では努力量 \times 遂行結果の交互作用は有意にならず ($\beta = -.218, p = .189$)、実体理論者 (+1SD) の間では努力量 \times 遂行結果の交互作用は有意であった ($\beta = -.714, p < .001$)。さらに、単純主効果の検定を行った結果、努力少条件において遂行結果の正の主効果が有意となり ($\beta = .672, p < .001$)、努力多条件において遂行結果の負の主効果が有意となった ($\beta = -.338, p = .033$)。つまり、増加理論者はどの条件においても能力に帰属する度合いは変わらないが、実体理論者は「努力が少なく結果が向上する場合」と「努力が多く結果が停滞する場合」で能力に帰属することが明らかになった。これは仮説1a、1bを支持する結果である。

次に、仮説2の検証を行うために、従属変数をさらに努力を要求する程度として、同様の分析を行った (表2)。分析の結果、努力量 ($\beta = -.620, p < .001$) と遂行結果 ($\beta = -.152, p = .039$) の負の主効果が、努力量 \times 遂行結果の交互作用 ($\beta = .147, p = .046$) がそれぞれ有意となり、暗黙理論 \times 努力量 \times 遂行結果の二次の交互作用 ($\beta = .132, p = .075$) が有意傾向となった。二次の交互作用が有意傾向

表1：主な測定項目の単純集計結果及び相関係数表

	平均値	標準偏差	暗黙理論	能力帰属	努力量帰属	努力質帰属
暗黙理論	3.786	0.971	-			
能力帰属	3.400	1.048	.321 **	-		
努力量帰属	3.433	1.262	-.047	-.246 **	-	
努力質帰属	4.417	0.751	-.027	.128	-.015	-
努力要求	3.133	1.202	-.086	.004	.072	-.164 +

注：** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 2：仮説 1・2 の検証で行った重回帰分析の結果

	標準化偏回帰係数 (β)	
	能力帰属	努力要求
暗黙理論	.306 **	.015
努力量 (0 = 少, 1 = 多)	-.083	-.620 **
遂行結果 (0 = 停滞, 1 = 向上)	.125	-.152 *
暗黙理論 * 努力量	.009	-.049
暗黙理論 * 遂行結果	.042	-.102
努力量 * 遂行結果	-.329 **	.147 *
暗黙理論 * 努力量 * 遂行結果	-.174 *	.132 +
R^2	.260 **	.422 **

注：** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

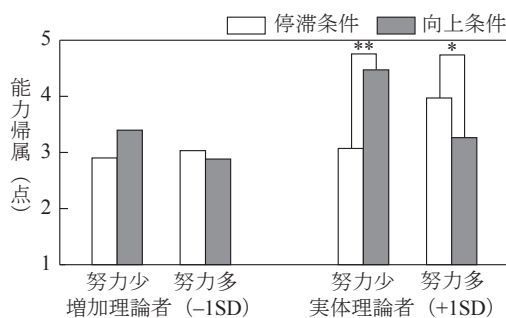


図 1：各条件における増加理論者 (-1SD)・実体理論者 (+1SD) それぞれの能力帰属得点

注：** $p < .01$, * $p < .05$

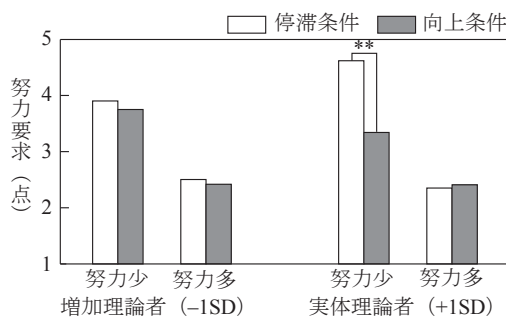


図 2：各条件における増加理論者 (-1SD)・実体理論者 (+1SD) それぞれの努力要求得点

注：** $p < .01$

だったので、単純交互作用の分析を行った (図 2)。その結果、増加理論者 (-1SD) の間では努力量×遂行結果の交互作用は見られず ($\beta = .020, p = .889$)、実体理論者 (+1SD) の間では努力量×遂行結果の交互作用が有意となった ($\beta = .395, p = .008$)。交互作用が有意だったので単純主効果の分析を行った結果、努力少条件において遂行結果の負の主効果が見られ ($\beta = -.534, p = .001$)、努力多条件では遂行結果の主効果は見られなかった ($\beta = .025, p = .860$)。つまり、増加理論者は努力量が少なくなるとさらなる努力を要求し、実体理論者は努力が少なく結果が停滞している時とりわけ努力を要求する度合いが強くなるのが分かった。

これは仮説 2a、2b を支持する結果である。

3.4 その他の分析

努力量への帰属を従属変数として同様の分析を行ったところ、努力量の主効果 ($\beta = .137, p = .062$) が有意傾向、努力量×遂行結果の交互作用 ($\beta = .618, p < .001$) が有意となったが、暗黙理論と関連する項はどれも有意とならなかった。努力量×遂行結果の交互作用が有意となったので下位検定を行ったところ、努力少条件においては遂行結果が有意な負の主効果を持ち ($\beta = -.677, p < .001$)、努力多条件においては遂行結果が有意な正の主効果 ($\beta = .560, p < .001$) が見られた。つまり、個人が持つ暗黙理論に関わらず、努力をせずに成績が停滞した場合と、努力をして成績が向上した場合は、遂行結果を努力量に帰属する度合いが高まることが明らかとなった。

また努力の質への帰属を従属変数として同様の分析を行ったところ、努力量の主効果 ($\beta = .201, p = .033$) は有意となったが、暗黙理論に関連する項はどれも有意とならなかった。ここでは、個人の持つ暗黙理論や遂行結果に関わらず、努力を多くしている場合に遂行結果を努力の質に帰属する程度が高まることが明らかになった。

4. 考察

4.1 実体理論者による他者の能力評価と、情報としての努力の重要性

本研究では、実体理論者は、他者の課題遂行の結果をもとにその他者の能力を評価する際、努力の情報を考慮するだろうと予測した。そこで、シナリオに登場する刺激人物の努力量と遂行結果を操作し、遂行結果 (成績の停滞または向上) を何に原因帰属するのか、そしてどのようなときにさらなる努力を要求するのかを検証した。

もし、実体理論者が努力の情報を軽視し、遂行結果のみから能力評価を行うのであれば、成績が停滞すればそれは能力がないから、成績が向上すればそれは能力があるから、というように、努力量にかかわらずすべての条件で能力への原因帰属がなされると考えられる。しかし分析の結果は本研究の予測どおり、刺激人物が努力をせずに成績が停滞した場合や、多くの努力の末に成績が向上した場合には、実体理論者が能力への原因帰属を行う程度は抑えられることが明らかになった。一方、増加理論者は、刺激人物の努力量や遂行結果がどうであれ、実体理論者に比して能力への原因帰属の度合いは低く、すべての条件間で努力への原因帰属の度合いに差はなかった。これらはともに仮説を支持する結果であった。

また、本研究では、実体理論者が努力を情報として捉えているのであれば、能力への原因帰属が困難な場面において、刺激人物に対してさらなる努力を要求するのではないかと予測した。分析の結果、増加理論者・実体理論者に関わらず、人物が既に投入した努力の量が少ない場合の方が多い場合よりもさらなる努力を要求するという傾向が見られたものの、これに加えて実体理論者に限って、人物の努力が少なく成績が停滞した、という能力判

断の難しい場面においてさらなる努力を要求していた。これらはともに仮説を支持する結果であった。また、さらなる努力を要求する度合いに関しては、暗黙理論の主効果は見られなかった。実体理論者が能力は固定的であると考えているのならば、これは一見すると直感に反する結果である。しかし、適性探索方略をとる実体理論者にとって、他者の能力を正しく評価し、適性を見極めるという課題をクリアすべき状況では、その能力評価の材料として努力を重視し、必要に応じてさらなる努力を要求するのは、納得のいくことであるといえるだろう。

これは、実体理論者が適性探索方略をとるという前提に立ったうえで、「情報としての努力」という、今までの研究で扱われてこなかった観点を導入したからこそ得られた知見であるといえる。本研究の意義は、実体理論者が増加理論者に比して、他者の能力を正しく評価し適性を見極めることの重要性を高く認識しており、それゆえに情報としての努力をより重視しているということ、実証研究を通じて例証した点にあるといえる。

4.2 二者間の相互作用研究の発展

本研究では、他者評価における原因帰属だけでなく、他者に対して努力を要求する程度にも着目した。そして、実体理論者が、他者の能力判断のための材料として、必要に応じて他者にさらなる努力を求めることを明らかにした。この結果は、暗黙理論の個人内の帰結にとどまらず、暗黙理論の二者間の相互作用を考える際に、考慮すべき事項であるといえる。

暗黙理論が他者に与える影響を検討した研究は、これまでもさまざまなかたちで行われている。たとえば Rattan et al. (2012) は、教師の暗黙理論が生徒にどのような影響を与えるかについて扱っている。また、今瀧他 (2018) はリーダーによるチーム差配が暗黙理論によってどのように異なるかを検討している。古典的なリーダーシップ研究においても、リーダーの原因帰属が部下に与える影響を扱ったものは数多い (e.g., 淵上, 2002; 松田, 2008; Mitchell, Green, & Wood, 1981)。しかし、評価者 (教師、親、リーダーなど) の暗黙理論によって異なる教育や差配を受けた被評価者 (生徒、子、部下など) が、その後どのようにその行動を認知し振る舞うのか、そしてそのことが被評価者の暗黙理論形成にどのような影響を及ぼすのかという問題については、なおも検討の余地があると考えられる。この二者間の相互作用について考える時に、本研究の知見は一定の示唆をもつ。なぜなら本研究は、他者に対して努力を求めるという一見増加理論的振る舞いが、状況によっては増加理論者のみならず、実体理論者によってもなされることを示しているからである。もっと努力するよう求められた被評価者が、評価者のリクエストを「努力によって能力を向上させることを期待されている」ととらえるか、「努力によって適性の有無を明確にすることを期待されている」ととらえるかによって、相互作用のダイナミズムは大きく変わってくるだろう。仮に前者のとらえ方がなされれば、評価者が

実体理論者であってもその信念は被評価者には受け継がれず、増加理論的な信念が育まれることになる。今後は、そのような暗黙理論の相互作用とそれを通じた伝達のプロセスについても検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 相田直樹・村本由紀子 (2016). 暗黙理論が複数課題選択時の努力配分戦略に及ぼす影響. 日本社会心理学会第 57 回大会, 関西学院大学.
- 今瀧夢・相田直樹・村本由紀子 (2018). リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響—失敗した成員に対する評価に着目して—. 社会心理学研究, 33, 115-125.
- Blackwell, L. S., Trzesniewski, K., & Dweck, C. S. (2007). Implicit theories of intelligence predict achievement across an adolescent transition: A longitudinal study and an intervention. *Child Development*, 78, 246-263.
- Buttler, R. (2000). Making judgements about ability: The role of implicit theories of ability in moderating inferences from temporal and social comparison information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 965-978.
- Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040-1048.
- Dweck, C. S. (2006). *Mindset: The new psychology success*. New York, NY: Random House.
- Dweck, C. S. & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, 95, 256-273.
- 淵上克義 (2002). リーダーシップの社会心理学. ナカニシヤ出版.
- Hong, Y., Chiu, C., Dweck, C. S., Lin, D., & Wan, W. (1999). Implicit theories, attributions, and coping: A meaning system approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 588-599.
- 松田幸弘 (2008). リーダーシップの帰属モデル. 晃洋書房.
- Mitchell, T. R., Green, S. G., & Wood, R. E. (1981). An attributional model of leadership and the poor performing subordinate: Development and validation. In L. L. Cummings & B. M. Staw (Eds.), *Research in organizational behavior*, Vol. 3. Greenwich: JAI Press. pp. 197-234.
- 及川昌典 (2005). 知能観が非意識的な目標追求に及ぼす影響. 教育心理学研究, 53, 14-25.
- Rattan, A., Good, C., & Dweck, C. S. (2012). "It's ok=Not everyone can be good at math": Instructors with entity theory comfort (and demotivate) students. *Journal of Experimental Social Psychology*, 48, 731-737.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 鈴木啓太・村本由紀子 (2017). 暗黙理論による課題選択方略の検討—課題難易度に対する柔軟性に着目して—. 日本社会心理学会第 58 回大会, 広島大学.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

(受稿：2018年5月1日 受理：2018年10月16日)